

## 悩めるフラッパーの溜め息

——教養的読み方 (その1) ——

伊藤 太郎

### A Sighing Flapper in Deep Trouble

——A Literary Study as Liberal Arts (No. 1)——

Taro Ito

大学の教養科目の「英語」のテキストとして、有名な英米作家の短編集を採用して、教室で学生達と一緒に読む。語彙や構文、文法事項の説明、模範訳文の提示といった〈語学〉の授業としての一通りの事をしてから、さっそく小説のテーマについての討議にはいる。作品鑑賞・作品分析こそが「教養英語」なるものの真髄である、と言っているようなものである。当然の事ながら、中高年の人生悲哀や深刻な老人問題を扱うものよりも、主人公が思春期や青年期にあって、人を愛することの歓びや悲しみを謳ったり、人生の船出に際して逡巡する苦悩を告白したり、人間存在の不可解さや人間社会の不条理性を告発する、そんな内容の短編小説が多くなる。大人になるための〈通過儀礼〉としての達成課題を扱ったり、苦渋に満ちた自己形成の生々しさを垣間見せる、いわゆる「開眼小説」、「青春小説」、「教養小説」などが多くなるのは用途柄、必然の道理だろう。

「教養英語」を担当する場合、語学演習に如何なる付加価値をつけるかが共通の悩みである。英文学を専攻する者として、先ず小説作品に表れる背景としての時代性の〈記号〉を読み取り、登場する主人公たちの人物研究を試み、展開される人間ドラマの意味するところを考察するように仕向ける。かような文学的理解の試み(作品分析)が、あまねく人間的状況を観察する際の洞察力を養い、問題意識を喚起し、人間研究に汎く資するものと考えられる。作品鑑賞をもって「教養科目」とする所以である。

今回以降シリーズとして、上で述べた人格形成や精神的自立に関連したテーマを扱った小説、つまり少年期から思春期・青年期にさしかかるような主人公が登場する小説ばかりを選んで、人間存在、人間社会に纏わる様々な問題を考えてみようと思う。特に、主人公の人物創造がユニークで性格分析や心理的考察の格好の対象となり得るもの、よって人間研究に資するものを選ぼうと思う。初回は、アメリカの今世紀の短編作家である Ringgold Wilmer Lardner (筆名 Ring Lardner) (1885-1933) の *I Can't Breathe* 『息がつまりそう』を取り上げ、主人公の若い女性の性格分析や思考・行動様式の考察を中心に、時代性に照らした時に作品が持つ存在意義を考えたいと思う。

#### 1. あらすじ

主人公の「私」は18才、目下「恋愛ごっこ」に夢中で、些か滑稽な程に〈盛り〉がついた、性的魅力の持ち主の女性である。家はニューヨークに在るのだが、今はナット叔父さん・ジュ

ール叔母さんの夫婦と一緒に、2週間の予定で夏の休暇に来ている。お金の心配などしたことがないほどの裕福極まる家庭の一人娘であるようだ。世界一周旅行（当時の成金アメリカ人にとって、これが大金持ちであることの証明だった）に出かけて行った両親が、一緒に連れて行ってやれない償いに、せめて休暇旅行でもと、彼女を叔父叔母夫婦に預けたという訳だ。しかし、退屈な田舎の保養地での長期滞在を決め込む叔父夫婦には、些か当てが外れた。何かワクワクするような刺激的なことなど起こりようもない。彼女は退屈しのぎの暇つぶしに「日記のようなもの」を書き留めて、憂さ晴らしをしようと思った。かくて、珍しい日記形式の短編小説の形で、若き娘の面白いことこの上ない内的独白が展開されるのである。

彼女には結婚を約束した本命の恋人、ウォルターがいる。ニューヨークで彼女の帰りを待つ彼に会いたくてたまらないのだが、切ない思いで悶々とする2週間ではなかった。彼女が心配するほど退屈極まる滞在ではなかったのだ。先ず、予期せぬことに、半年間の世界一周旅行から帰ってきた「元」婚約者のゴードンがさっそくシカゴから連絡をとってきて、連日のように長距離電話やら夜間発送電報やらで、熱き求愛の言葉をぶっつけてくる。彼には諦めてもらうしかないと言いながら、満更でもなさそうだ。しかし実はゴードンなど目ではない。当地で、すてきな若者フランク・キャスエルに出会う。お互いに一目惚れでいっぺんに意気投合してしまった。フランクは機知に富んでいて冗談がうまく、一緒にいてとても楽しい。ゴルフも上手。ダンスもウォルターとは比較にならないほどうまい。食事も、散歩も、ゴルフも、ドライブも、夜のダンスもと、いつも彼と一緒に、もうめろめろになりそう。しかも彼は資産家の御曹司で、作家志望ときている。彼の押しの強さもあって、つい結婚を承諾してしまって、このままでは逃げられない。乙女心は揺らいで、迷うばかりである。

だが、優柔不断で自分で決着がつけられないところが、彼女の大きい欠点でもあり、また悩ましき魅力でもある。すっかり恋人気分のゴードンにはどうしても真相が切り出せない。やっぱり心に決めていたウォルターに最終決定しようとは思うものの、ここまで親しくなったフランクには、未練も愛着もあり、また裏切って深く心傷つけることにもなるので、どうしても本当の事を告白する勇気がない。困り果てて、もう「息がつまりそう。生きてられないわ」と悲嘆の溜め息を吐きながらかつてのボーイ・フレンドのマール・オリバーのことを思い出していた時、神の救いか偶然の一致か、マールから久しぶりに連絡があって、わざわざ滞在先のホテルまで会いに来ると言う。結婚の申し込みをしに来るのは予感でわかる。ああ、彼のことを忘れて、どうして他の人が好きだと思い込んでしまったのかしら。丸1年経ってもまだお互いを気遣っているのは、二人がきっと結ばれる運命だったんだわ。この際マールとくつつくのが、「事態打開のための最良の、唯一の方法」なんだわ。彼の口からみんなに説明してもらおうわ。でも彼が乗って来る電車が遅れたらどうしよう。「待つてられないわ。我慢できないわ」と、また溜め息を吐く。

## 2. 作家について

この小説は主人公の若い女性の「性格付け」の面白さに尽きると言ってよいだろう。おそらく精神分析的にみても、また1920年代の時代風景をそのままに映す人物像という視点から見ても、生き生きと眼前に彷彿する主人公の心理描写は作者の面目躍如とするところだ。ロードナーの有名な代表的短編に、*Alibi Ike* 『アリバイ・アイク』や *Champion* 『チャンピオン』があるが、いずれの主人公もそれぞれの *characterization* (人物創造) の巧みさから、「何か事ある毎に言い訳を口にする、自己弁護を身上とする愛すべき人物」、「不具の弟さえわが身の栄光の

ためなら平気で犠牲にするような、冷酷卑劣な人物」の典型として好んで引用され、「あいつはアリバイ・アイクだ」、「彼はミッジ・ケリーだ」という隠喩が当時流行したほどであった。この作品に登場する「私」の場合も、恐るべきその自己中心性、未熟な幼稚性、軽薄な〈お姫様〉願望、男のことしか眼中にない浮気性などが、どれも分ち難く有機的に結び付いて、このフラッパー (flapper=自由奔放な行動、服装で時代を先説った20年代の現代娘をこう呼んだ) の中に見事に収斂している。当時のアメリカの時代性を芬芬と振り撒きながら、一見欠陥だらけに見えるが、その実、熱し易く冷め易い彼女の感情優位の優柔不断さや思考停止の白痴性が、この上なく透明な女性的魅力に思えてくるから不思議である。どこまでも自分の気持ちに正直なあまり一人悲劇のヒロインを演じる、自分でもコントロール不能の性的魅力を持て余し気味にしている、愛すべき乙女と思えてくるのである。フェミニズム的観点からすれば、男に阿るだけの、極め付きの単純思考タイプであろうから、きっとこのような誉め方は不謹慎に映るかも知れぬ。

そもそも、Lardner は1920年代のアメリカの文壇・ジャーナリズムの世界にあっては、絶妙の口語表現を駆使した対話場面を有効に使いながら、時に鋭い人間観察に基づいた人を噛み捨てるような毒舌・風刺で、時にアメリカ的陽気さに裏付けされたユーモア精神で、時代に生きる庶民の群像を描く作家として、つとにその名声が高かった。同世代作家たちは、誰もが競うようにして尊敬する彼との親交を求め、交友を誇ったという。例えば Sherwood Anderson 然り、Theodore Dreiser 然り、Scott Fitzgerald 然りだった。辛辣に20年代の世俗性をこき下ろした批評家 H. L. Mencken でさえ、彼の時代を見つめる確かな目と、健全な批判精神を感じて高く評価した。Lardner 自身は highbrow の小説家ではなく、lowbrow の humorist を自称し、大衆短編作家と呼ばれることを喜んだ。作家業を始める前に、スポーツ紙の新聞記者として名を馳せていたためか、もともと彼の作品には文学的気取りも気負いもなかったが、時代に深く身を沈めて潜行することで、逆に、次に述べる状況性を体感会得していたのである。

### 3. 〈時代状況〉俯瞰

#### (1) 未曾有の繁栄

第一次世界大戦後から1920年代にかけてのアメリカは、通商・金融両面で、名実共に資本主義世界の盟主の道を一途に歩んでいた。幸いにも戦火に塗れなかったアメリカ経済は特需景気で活気づき、工業製品・農産物の輸出額は飛躍的に伸びたのである。特に、自動車、電気機器、石油、化学、建設などの国内産業の発展が目ざましく、G N P の伸びは1921年の696億ドルが、1929年には1031億ドルに大幅増加した。大戦勃発時に約40億ドルをヨーロッパから借り入れていたアメリカは、戦争終了時には世界第一の債権国に押し上がり、約100億ドルをドイツを含むヨーロッパに貸し出していた。民間海外投資も1919年には70億ドルだったものが、1930年には172億ドルへと膨れていた。戦後復興のヨーロッパ諸国へのドル建ての援助金や貸付金で、アメリカの工業製品を輸入させる結果になった。アメリカの資本輸出が戦後ヨーロッパの経済復興を可能ならしめた訳で、ベルサイユ体制下のヨーロッパを米国経済に依存させることに成功した。

国内産業の発展は、好調な輸出は勿論のこと、急激な国内消費の伸びにも支えられていた。月賦や通信販売のような大量販売方式が消費者向けに整備され、また大量生産された製品が販売されるに当たっては、第三次産業 (ホワイトカラーの職域) の流通・運輸・広告・販売業界の飛躍的発展が促されることになった。3人の共和党大統領のもとで政府は減税策を推進し、

所得税累進制を緩和し、国民の購買意欲を刺激したことも大きかった。例えば乗用車の販売台数は年々増加の一途を示し、1929年には1年間で450万台が販売され、全自動車登録台数は2650万台にも達した。高級車の所有は繁栄を享受するステイタス・シンボルになった。因みに、1928年の世界の工業製品生産高を引用しておけば、その5分の2以上をアメリカが占めていたが、新興産業たる自動車製造の場合は、実に5分の4を一手に引き受けていた。

アメリカ経済の繁栄にあやかりたいと思う人々が1920年代の中頃、株式投資にバラ色の夢を託し、正しく空前絶後の熱狂的株式ブームが起こった。人々は猫も杓子も、我勝ちに投機に走った。大量の株式購入に際しても、信用買い、つまりその株価の10パーセントに当たるわずかな現金を頭金として払い込めば、残りは銀行や証券業者からの貸し出し資金で充当できた。ニューヨーク株式取引所の平均株価は1928年後半から翌年前半期をピークに大幅な値上げを更新し、出来高も増加の一途をたどった。一般大衆をもその渦の中に巻き込んだ投資熱は、危険な投機的性格を帯びて、バブル経済が膨れに膨れたのである。そして1929年10月24日〈暗黒の木曜日〉の株価大暴落による金融恐慌に至って、もぐり酒場と、露な衣装と、狂おしいダンスの流行った喧噪の20年代は終わりを告げたのである。

## (2) 価値観の地滑りの変動

かような史上稀にみる産業発展や経済繁栄がアメリカ人の内面世界、価値観や人生観にどのような変質をもたらしたかは整理しておく必要がある。「アスピリン時代」とも呼ばれた、頭痛がする程に狂おしい20年代という「時代性」が主人公の性格形成や人間性にも大きく影響を与えている必然性を考えるからである。無論、〈時代の申し子〉たる彼女の人物創造の背後に、的確に「時代」を読んでいた作者の社会風刺の峻烈な目を感じるという意味である。

先ず、物質的繁栄をもたらした大量生産・大量消費の時代にあって、「消費は美德なり」とする欲望刺激・欲望充足型の価値観が受け容れられたことであろう。「アメリカのビジネス(仕事)はビジネス(商売)である」と大見得を切ったのは、第30代大統領カルヴィン・クーリッジ(任期1923年-29年)であったが、利潤追求を是として金儲けに奔走する一方で、人々は次々と市場に出回って来る新製品の電化製品やラジオ、自動車などに購買意欲を滾らすことを余儀なくされた。物質的享楽を得んがために、或は、人並以上の「アメリカ的生活様式」を享受するために、立身出世をして大金持ちになる〈一攫千金の夢〉に社会全体がうなされる結果となった。質素儉約の伝統的ピューリタニズムの呪縛を解かれて、人々はなんとなく浮き足立って、欲望充足の個人消費に身を任せた。「イエス・キリストこそが近代的宣伝術(コマーシャル)の創始者、偉大なセールスマンなり」という時代のキャッチフレーズが、正しく公然と人の口に乘った時代だったのだ。

出世欲、金銭欲、所有欲といった、一連の欲望を目覚めさせたものは、「時代は正しく〈進歩〉している」という確信に満ちた時代認識でもあった。無論、諸学問領域における新発見や新法則がコマーシャルイズムの波に乗って応用化され、工業製造分野における著しい技術革新として日の目を見ていた。そのまま目に見える形ですぐに社会還元される科学技術の日進月歩の進展ぶりが、未来への確信を深めさせたからだ。アメリカ社会全体の歯車がしっかりと噛み合って、順調に作動している手ごたえを誰もが感じていた。

産業・流通社会の到来は、他方で都市化現象に拍車をかけた。1920年の国勢調査で、始めてアメリカの都市人口が農村人口を上回った。都市化現象はなにも物理的な人口移動を指すだけでなかった。自動車の急速普及による交通革命、ラジオ・電話網の整備による通信革命が、田舎の特色ある地方性を徐々に消失させ、農村生活者にも消費型の都会的価値観を次第に持たせ

ることになったのである。地方農村部においても、自動車や洗濯機などの大型耐久消費財の普及によって生活水準が一挙に上昇し、それと共に、産業・ビジネス社会の特徴である能率性や効利性を旨とする合理精神が、受け容れられるようになった。アメリカが世界に誇る快適な「アメリカ的生活様式」はこの時代にほとんど確立された訳だが、同時に、繁栄のこの20年代を境に、アメリカ人の精神性に地滑りの大地殻変動が起こったと言えよう。画一化・規格化された商品の流通は、全国規模での価値観の画一化・規格化を招来し、結果として、精神レベルでの都会化現象に拍車をかけることにもなったのである。

### (3) 風俗革命

1920年代のアメリカは、いろいろな意味で画期的な解放の時代でもあった。特に若者文化においては、まさに〈風俗革命〉と呼ぶにふさわしい斬新スタイルが出現した。流行最先端を自任するフラッパーは、短いスカートに口紅・断髪という出で立ちで、これまたあのハリウッド美男俳優のバレンチノばりにオールバックにポマードでかてかの男友達と、もぐり酒場(speakeasy)で酒を飲み自動車に乗ってペッティング・パーティーに出かけた。解放感に浸る大学生達の深夜パーティーの乱痴気騒ぎは日常的な光景だったようだ。事情は地方の小都市でも同じで、フィッツジェラルドの*This Side of Paradise*『楽園のこちら側』(1920年)やヘミングウェイの*The Sun Also Rises*『日はまた昇る』(1926年)が、このような新世代の新風俗を描いている小説として大いに注目を集めた。都会的青年文化に根ざした新しいタイプの行動様式・思考様式が全米的共時性を帯始めたことはすでに述べたが、性道徳、性風俗の解放の気運も若者層を中心に大いに盛り上がった。

その性風俗の解放に大きく関わったのが、若者文化の情報発信源としてのハリウッドであった。映画製作の隆盛で、ハリウッドが当時のアメリカの若者にとって、憧れの夢の都、華やかな繁栄の象徴であったことは、新婚旅行でハリウッド詣でを計画しているこの小説の主人公が5カ月前の今ごろから心待ちにしている「もう我慢できないわ。もう待てないわ」と、溜め息をつくところを見ればよくわかる。トーキーが興ったのは1929年であって、未だサイレント映画の時代だったが、ハリウッドの銀幕スター達の演じた恋愛物が、新しい時代の到来を予感させるものとして、如何に拍手を持って歓迎されたかは想像に難くないだろう。

隆盛を極めたのは、なにも映画だけではなかった。一般大衆向けの芸能・娯楽・スポーツなどが、アメリカ的中流文化として定着したのがこの20年代だった。元来が新しい流行や価値観を追い求めるのが若者であり、またある意味で「若さ」に絶対的価値を認めるアメリカ的土壤もあって、豊かな購買力を備えた若者世代が、そうした大衆文化の送り手・受け手としてその定着に大いに与った。これは無論、進学率の向上、高等教育の普及による文化的中間層(ミドル・ブラウ)の台頭と軌を一にしていた。当時の大学生(卒業生)が競ってヨーロッパへ遊学するのが流行になった事からも分かる通り(ゴードンが然り)、若者にモラトリアムを保障できる程に、社会全体が裕福な中流化を遂げていたのである。

主人公が演じて見せたその面白い〈どたばた喜劇〉は、このジャズ・エイジ、別称「すばらしきナンセンスの時代」における、中流階層の精神文化そのものの悲喜劇でもあった訳だ。彼女は人生の楽しきこと、感激の場面を一つ一つのメロディーに託して覚えていたのだが、狂おしく切ない調べの曲にのって時代はまさに狂奔していた。彼女の愛好するジャズ・ナンバーは無論の事、リズムカルで激しい動きの故に享乐的雰囲気 matches チャールストンも、揺れるスクリーン上に短時間の異次元空間を演出してくれた無声映画も、どれも日常生活時間からの離脱感覚、夢現ともつかぬ浮遊感覚を刺激して、若者の「一人舞台の主人公」的雰囲気を

育んでいたのだ。

#### (4) 成金アメリカ人の観光旅行

本題の小説に立ち戻れば、登場人物がいずれもニューヨーク、シカゴ、ボストンといった大都市の住人であることに注目せねばならないだろう。主人公は当時世界一のファッションブルな消費都市となりつつあったニューヨーク在住であった訳だが、若者全員が都市型の消費・娯楽の社会を満喫できた金持ちの家庭出身であるらしいという事だ。世界一周旅行に出かけた両親、これまた半年間の世界旅行から帰ってきたばかりの男友達、長期滞在のバカンス休暇を楽しむ主人公たちという設定が、20年代のアメリカ社会の繁栄を大いに享受できた階層に属し、その繁栄自体を体現する存在ともなっている事を示している。

実際、1920年代は、人生享楽の楽しみを知った成金のアメリカ人達が世界中の有名豪華ホテルを闊歩して渡り歩き、高級ナイトクラブやキャバレー、劇場などに大挙して出沒した時代だった。そもそも、娯楽のための観光旅行は前世紀末から一般的であったが、戦争によって人間の移動衝動が刺激されるのか、交通手段が整備されるのか、第一次世界大戦によって中断されていた観光旅行が、平和になった1919年以降爆発的に流行した。とりわけ、今や開拓すべき「西部辺境」を失ったアメリカ人にとって、世界旅行こそがモービリティを旨とするフロンティア精神を満足させる代替品となっていたことは言うまでもない。

観光にも戦後復興の礎を求めたヨーロッパ諸国では、アメリカ人ミリオネアを迎え入れるべく、ホテルが豪華になっただけではなかった。移動手段である汽車や船が豪華な社交場に変わっていた。国境を越えて走る急行寝台列車として有名なブルー・トレインやオリエント・エクスプレスの豪華なコンパートメントには、何組かの金持ちのアメリカ人カップルが陣取るのがお決りだった。また、タイタニック号の遭難事故は1912年の事であるが、大西洋定期航路の超豪華客船でフルコースのフランス料理のディナーに舌鼓を打ち、夜は船上ダンス・パーティーを楽しむ乗客の大半はアメリカ人だったのである。

さらに小説と関連して述べれば、小説の舞台が日常生活の基盤たるマイ・ホームではなく、滞在中のホテルになっている事も考える必要があるだろう。ホテルとは、そもそも都会空間の縮図としての意味を持っている。20年代の都市には龐大な人間が流入してきたが、生まれも育ちもバラバラな男女が寄り集まり、その場の付き合いをするというホテルの偶然性、匿名性、解放性は、日常時間とは異質な祝祭感覚に満ちた都市空間を演出してくれる。予期せぬ人との、予期せぬ出会いは、主人公が求めて止まぬアバンチュールそのものである。若者的出会いの格好の舞台となっているという意味で、正しく20年代の遠心的・自己増殖的アメリカ状況を演出していたと言えるだろう。

## 4. 主人公の性格分析

### (1) 刹那的享楽傾向

先ず何よりも彼女を特徴付けるものは、「今が楽しければいい」という、彼女の享楽傾向であろう。欲望指向の都会的消費社会が、いろんな意味で画期的な「解放気分」を蔓延させていたことは上で述べたが、彼女こそ、善きにつけ悪きにつけ、刹那的な享楽気分酔いに酔った20年代ジャズ・エイジの〈申し子〉的存在だった。そもそも日記とは、元来が本心を暴露して、他人には見せない自分の恥部や醜部を書き留めるものであって、彼女の弱みを覗き見る読者はその分差し引いて考えないとフェアではない。だが、敢えてそうした日記形式を設定した作者の意図を考えた場合に、主人公の苦悩する（精一杯、真剣に悩み込むから一層滑稽に

なる)、揺れる乙女心に、繁栄に現を抜かす「時代性」を読まねばならないのだろう。

正確に言えば、彼女は先に述べた、流行の最先端をいくフラッパーではないかも知れない。しかし、肌も露な服装で男の視線を釘付けにすることはなかったにしても、金の使い道に困るような（金が儲って仕方がなかった）家庭に生まれ、自由恋愛に憧れ、男に血道をあげ、理性も分別もなく突っ走り、そして結局破綻を来す——そういう意味では、フラッパーの資格充分であろう。当時の若い女性を代表し、華やかな虚飾の時代の雰囲気をしっかり和表現して、その混乱した〈どたばた喜劇〉を存分に一人芝居で演じてくれたのだ。衝動に身を任せて次々と新たな恋愛関係を作って、自ら墓穴を掘る。自由であったはずなのに、八方塞がりの個人的状況を作り上げてしまうところが作者の狙う眼目たる irony であって、如何にもそれは喜劇であり、また悲劇でもある。まだ完全に自堕落な女に成り下がっていないのは、僅かばかりに残った彼女なりの理性の葛藤があるからだろう。

主人公に付与された、時代を反映する享乐的傾向を具体的に考えてみよう。それは先ず、一貫性のない刹那的、陶酔的恋愛観として彼女の中に具現されている。実際、彼女の見境の無い〈惚れっぼさ〉は、驚きを通り過ぎて感嘆をさせる程である。一体どの様にその移り気な衝動性を理解すれば良いのだろう。「14才の時から（18才のこの歳になるまで）、少なくとも年に5回ずつ、婚約してきたわ。でもそのことは、もちろんそれほど悪いことなんかじゃないわ。それに本気で婚約したと言えるのは全部でたったの6回だけだったんだから」と、些かの良心の曇りもなく、あっけらかんと無邪気にその尋常ならざる〈浮気性〉を告白する。今年中にウォルターと結婚するつもりであることを告白したのに、母親に馬鹿にされ信用してもらえず、彼との運命の出会いを弁明する場面を例にとろう。まるで婚約や結婚の意味するところなど理解していない幼稚性だ。とにかくこんな具合である。

でもウォルターの場合は違うのよ。もし彼の方から求婚してなかったら、私の方から求婚してただろうって、正直にそう思うの。もちろんそんなこと（自分の方から言うなんて恥ずかしくて）しなかったでしょうけど。でも（彼に求愛してもえなかったら）きっと死んでいただでしょう。それに今度の彼とのことは結婚するつもりで婚約した最初の事なんだから。いつ結婚しようかって話を他の男の子たちが切り出すような時は、私はただ笑っちゃうだけで誤魔化したけど、でもウォルターとの時は、まだ婚約して10分も経ってないうちに、彼は結婚のを持ち出したわ。結婚する気じゃなかったら、彼とは婚約なんかしてないわ。

しかし、同時平行的に、複数の男性を天秤に掛けながら付き合っていることを、ことさら不道德性の証拠として論うのは、些か見当違いかも知れぬ。異性に目覚める頃から、複数の相手と順次週末のデートを重ねて、異性を見る目を養う修行を積む、いわばアメリカならではの習慣を考慮に入れねばならないだろう。日本と違って、結婚相手を自分で捜して、確保せねばならない主人公の彼女にとって、ステディ（steady＝真面目に付き合っている、本命の恋人）であるウォルター以外に、何人も好きな人ができて重複して付き合うのは、ごく当り前の若者の行動であるのかも知れぬ。いや逆に、純粋な結婚願望に燃えて（彼女は結婚に如何に憧れ、夢を抱いていることか）、真剣に結婚相手を捜しているとは言えないのだろうか。

確かに彼女の場合、なんらかの衝動性、対人関係を維持する能力の脆弱さは窺える。これは否定のしようがない。だが、後先の事を考えない、若者にしかできない、そういう恋愛こそが〈本物〉という彼女の声なき主張は読み取るべきだ。利害や打算に目敏い大人の世界の汚れた恋愛より、よほど純粋だと言いたいようだ。祭り気分にも似た軽躁状態の中で、感情の赴くま

ま新しい恋に落ちることが、自由を満喫できる若者の特権であるかも知れない。「彼ら（叔母さんたち）はきっとダンスなど楽しめなかったんだと思うの。人間年取ってくると、何かを純粹にするってことが本当にできなくなるため、ダンスも心から楽しめないってことよ」と、無心に楽しむことの効用を宣言して憚らない。恋愛に限らず、彼女の享楽性の論拠は後先考えない刹那主義にある。もはや困苦欠乏に耐える必要のない豊かな社会になった以上、遠慮も抑圧も自己規制も必要ない。感性や感覚の全面解放は時代の要請であった。

そうした見境の無い結婚願望や次々と相手を変えていく男女関係様式を若者の純粹さの証拠として挙げる論理は、一面の真理はあるのだろうが、しかし作者は妥協をしない。世は挙げて放蕩的雰囲気満ちている御時世であった訳だが、彼女も乗り遅れまいと「恋愛ごっこ」に勤しむ。「もし遅れたらどうしよう」と言って、マールの乗った列車の延着をひどく気に懸けるが、いみじくもその〈late〉という言葉が、時流に乗り遅れることに神経過敏になっている彼女の強迫性を証明している。しかし、人を本当に愛することを未だ知らない彼女は、必然性のある恋愛ができない。偶然の出会いで仲良くなった相手と、行き当たりばったりの、その場限りの恋愛に走る。端から、持続性のある恋愛なんて不可能だったのである。

## (2) 未熟な自我

彼女が〈時代を翔けよう〉として翔けられず、墜落したイカロスになってしまった原因を、彼女の性格的欠陥に求めよう。一番特徴的なものは、その精神的な未熟さ、幼稚性をたぶんに残した自我構造である。それが最も如実に現れるのが、「断わる」ということができない優柔不断さにおいてである。要するに、意志や意欲、決断力や実行力を備えた確固とした「自分」というものが未だ未確立で、「人は人、自分は自分」という割り切りができないために、状況に流され、他人の強い求愛を拒絶できないことになる。結果的に、それで自分で自分の首を絞める、自分で自分をにっちもさっちも身動きのとれない状況に追い込む事になってしまう。葛藤処理がまるでできない。〈息が詰まる〉ような閉塞状況に陥ると、「もう耐えられないわ」「息が詰まりそう」「もうこれ以上考えるのはやめておこう」などと言い放って、現実逃避をする。耐えきれない葛藤状況に際しては、自我防衛のために、自ら〈思考停止〉という安全装置の弁を抜くのである。時代の狂乱的なお祭り気分を象徴するような思考停止である。

断わることができない彼女の、一見余裕のある優柔不断さは、〈優しさ〉と見間違ふ。人にも甘い代わりに、自分にも甘いと言わざるを得ない。余裕のある優しさを装うことで、相手の男性に嫌われないようにする態度が見え隠れする。取り繕った、欺瞞的な態度が鼻持ちならないのである。取り澄ます〈甘え〉が許される良家の育ちもあるが、厳しい人間関係の対立場面や葛藤状況の体験がないことが決定的なのである。十分にモノを買い与えられて育った裕福な家庭環境の中で、自我を固めて対決場面に赴くことなど必要ないのである。一貫した自我を全うしてフラストレーションに対処しようとする決意など微塵もない。作者ラードナーが、鋭い風刺の対象にしようとするのは、高級ナイトクラブに入り浸って社交界を遊泳し、保養地に遊んではゴルフ三昧の長期休暇を楽しむ富裕階級の、その取り澄ました世俗的欺瞞性なのである。対象が子供であれ、若い娘であれ、こと人間性風刺の段になると容赦はしないのだ。

彼女の未熟性を示すものに、もう一つ、結局は自分の事しか考えない〈自己中心性〉がある。相手のことを気遣う女性的配慮を見せているようで、その実、そうではないことが露見する。自己弁護の言い訳にすぎないことが明らかにされてくる。例えば、自分には別に結婚を約束した相手がいるという、その事の真相をフランクに切り出せなくてぐずぐずしている言い訳に、如何に自分がフランクを気遣っているのかを強調する行がある。自分を正当化する方便なのだ。



ときどき死ねたらいいのと思う。多分それが唯一の解決方法だし、関係する人みんなにとって一番良い事なのよ。事態が今までのままだもし変わらないのなら、私本当に死ぬつもりよ。でも、もちろん明日全てに決着がつく。フランクの事を言ってるんだけど、だって、真相を話すことでたとえどんなに私達二人が傷つこうとも、そうしなくっちゃならないんだから。いや、私がどんなに傷ついても構いやしないわ。彼を傷つけることを考えると、もう気が狂いそうになっちゃう。耐えられないのよ。

ゴードンに対してもそうである。幾度となく真相を彼に打ち明けるチャンスがあったのに、納得のいく説明をして彼に分かってもらうには、「接続が悪くて電話が遠いから、やっぱりやめよう」とか、そもそも求愛を断わるなんて「手紙で済ませるべき事ではないから、よした方が良くんだわ」とか、とにかく解決を先延ばしして、自分で決着をつけられない言い訳ばかりを探すのである。相手の事を心配するふりをして、電話のせいにして、世間の常識のせいにして、自己弁護の口実探しに終始するのだ。

自分本位に都合よく物事を考えがちな彼女の、我儘な身勝手さが暴露されるのが、マールに全てを負わしめて〈責任転嫁〉を目論む最終場面であろう。あらすじの項で述べたように、土壇場で、今まで音信がなかったマールから連絡があって、これ幸いと決着をマールの手に委ねる場面である。自惚れの強さと同時に、自分の都合しか考えない、無責任でいい加減な彼女の衝動傾向が、浮き彫りにされてしまう。結局、彼女は人のことなど全然考えていなかったのである。相手の男を少しも愛してはいなかったことが、歴然となるのだ。

結局こうするの（マールとくっつくこと）が、事態打開のための最上の方法、唯一の方法なの。私の口からはフランクに何も言う必要はない。だって私がマールと一緒にいるのを見て察してくれるでしょうから。日曜日に（ニューヨークの）家に帰った時にウォルターとゴードンが家に電話をかけてくるでしょうから、その時二人を夕食に招待して、そしてマールの口から（事情を）説明させよう。二人一緒にその場にいた方が一人の時より傷つくのがたったの半分で済むから。

### (3) 豊かさの病理

彼女が浮ついた〈恋愛ごっこ〉のなかで、人を本当に愛しているのではないことは一目瞭然であろう。その場の一時的感情に溺れ、幻想的一体感に我を忘れる、ただそれだけだ。以後、恋愛関係樹立と錯覚した相手の男が、勝手に期待を募らせ、夢中になって、後を追っかけてくるのは大歓迎である。彼女と相手の男の意識のズレは決定的なのだ。彼女が自分の方から一途に愛し続け、献身的に尽くすことは、到底不可能である。できれば格好がいい男の子に「ちゃほやされたい」という願望が強い。当節日本でも流行のお姫様症候群の〈走り〉である。群がる男性は、彼女の自己愛を満足させてくれる装飾品の様な存在と言えは言い過ぎだろうか。彼女が次々と目移りして新しい男性と婚約してしまうのも、まるで商品を買って換えるような気安さ、気軽さである。当然、飽きのきた使い古しのモノよりも、新しく目の前に登場したモノに心動かされる道理である。彼女にとって、恋愛関係が全人格的な人と人との深い係わり合いではあり得ないわけである。とすると、コマーシャルイズムに踊らされて物質的欲望を際限なく燃やし始めたアメリカの消費社会の病理性をも、彼女は内在させることになる。

その装飾品は、我儘で移り気なお姫様のプライドを満喫させ、気に入られている内は、暫し存在価値がある。しかしあくまでも、中身勝負ではなく、見た目の良い〈虚飾性〉を強いられ

る宿命なのだ。彼女が装飾品たる男性に求める属性は、登場している男性達の描写から推測するに、先ずハンサム・ボーイであるという外面的特徴だ。awfully nice looking boy であることに加えて、cute (かわいらしい) であればなお良い。そしてフランクのように、女の子を飽きさせない巧みなテクニック (例えば、冗談や駄洒落がうまいこと、機知に富んだ話題提供ができることなど) も大いに必要であろう。さりげなく見せる、洗練された都会的センスやマナー (スマートで機転の利いた行動、問題処理能力など) も大事な要件である。また、彼女のお姫様願望を満足させるほど情熱的でなければならない。毎日のように長距離電話や夜間発送電報でついこちらが赤面するような求愛攻勢が臆面もなくてできたり、花束攻勢で息つく暇もないほどにせねばならない。芸能やスポーツ全般に秀でていることが望ましい。中でもダンスが上手なこと (本命のウォルターは偏平足でダンスがうまくないことが唯一の欠点である) が一番肝心であるが、他にテニス、ゴルフができるに越したことはない。また既に述べたが、音楽愛好でハリウッド情報にも詳しく、有名スター達と面識があれば、もうこれに優るものは何もない。最後に、もちろん家が裕福であることが絶対条件である。ゴードンは21才なのに半年も外国旅行を楽しめるご身分だし、フランクはダートマス大学出の24才で資産家の御曹司である。

要するに、このような条件を満たす若者が最もファッショナブルなブランド品だったのだ。そういう意味ではフランクなどは最もお奨めのブランド品だった。ブランド銘柄を自任する男は、撥刺とした若さ、軽妙洒脱さ、都会的洗練さ、ファッション・センスなどを標語に自己演出にこれ務めねばならない。(女の子に気に入られることばかりを優先してエステ通いをするような、今日の日本の軟弱ボーイをつい連想してしまう。) 体裁の悪い、都会的センスのない、スポーツの一つもできない、根暗な、欠陥品とも呼ぶべきオトコなど、端から相手にされない。当然の事ながら、目移りした物は、望めば所有できるという〈幼児的全能感〉が根底にあるようだ。金満社会では少しでも流行のモノを手にした欲望に歯止めが効かなくなるのは仕方がない。そういう耐性欠如の幼児的所有欲をいつまでも容認してくれるのが、豊かな消費社会であるという余分な読み取りまでしたくなる衝動に駆られるのだ。

#### (4) 強迫的時間観念

欲望に歯止めが効かなくなると、現実というものに満足できなくなる。現実直視ができないから、自己反省もせず、自分の分も弁えない。負荷を越える葛藤状況になると、現実逃避的に思考停止の安全弁を開いたり、〈解決の先延ばし〉傾向に走ったのは既に述べた。彼女の場合、もう一つ、現実逃避的傾向としての〈空想癖〉も挙げることができよう。作品の文体的特徴として、「もし今、～だったら、～なんだがなあ」の仮定法過去、あるいは「もしあの時～していたら、～だったのになあ」の仮定法過去完了の文章が頻出している。例えば、「ウォルターが今ここにいたら、どんなにか素敵なのになあ。そのことを考えただけで心臓が止まりそう」とか、「(今更遅いけど) そうならないようにすることができたんだったら、どんな犠牲だって払うのに」とか、事実と反することや実現不可能なことを仮想したり願望したりする。

一見、如何にもこれは18才の夢見がちな乙女性を物語るように思える。結婚を夢みる純真さと同質の、純潔無垢とまではいかぬまでもある種の天真爛漫さである。しかし、それは彼女の本来的な幼稚さから来る葛藤回避の意味合いが強い。自分の感性を大切に、自分の感情に正直に奔放と生きているようで、案外、未熟さが深刻に影を落としているのだ。毎日毎日、日々刻々、生き生きと心弾ませているのは、いかにも若者らしい新鮮な心的態度だが、しかしそれは状況に左右され易い彼女の自我空間の脆弱性だった。一見、自由な情緒優先の姿勢が、案外不自由で閉塞した精神状況を示していることを、彼女の時間観念に見てみよう。

彼女にとって、毎日毎日がお祭りのような、何かすばらしい、予期せぬ事が起こりそうな、そんなハイな気分の連続である。しかし、そのような昼間のお祭騒ぎの軽躁気分とは裏腹に、日記をかく夜になると、抑鬱気分になり込んで不安に戦くといった案配である。日内周期の感情の浮き沈みが顕著に見られる。その日一日、情に絆され、状況に流されればなしの自分の行動の後始末に頭を痛め、明日はまたどんな窮地に立たされるかも知れぬ予測不能性を嘆くのだ。彼女にとって、正しく一寸先は闇、明日はどんな呪わしい、しかし心浮き浮きする一日になるか、計り知れないという訳だ。彼女の言葉を引用すれば、「人生は絶望的だけど、とつてもすばらしくもある」のだ。不安と希望が混在して待ちかまえている感じだ。だんだんと追い詰められていくに従って、焦燥感や不安感ばかりが募って、心浮き浮きすることがなくなるのは当然であろう。

こういう時間感覚は通常のものとは言い難い。普通の人間ならば、もう少し平坦な時間の流れである。「自分」というものを持っているから、新たな事態の出現であたふたと右往左往させられることは割と少ない。時間の流れに対する、確かな信頼感の根底には、「自分は自分」、「何か起こっても、ちゃんと自分なりの対処が出来る」という、自分自身への揺るぎない自信が前提となって存在しているのだろう。彼女の場合は、そういう揺るぎない自信というものがなく、そのために〈強迫的な〉時間観念を持ってしまうのである。彼女がまるで時間に追い立てられるように、次から次へと恋愛相手を変えていって持続的な人間関係が保てないのも、すべて帰るところ、根本的なレベルでの自信のなさがあるためで、そのために自己不全感、自己不確実感に悩んでいるようだ。彼女の場合、その内面世界の空虚感が、親子関係の葛藤（両親も裕福な生活に現を抜かしているようだが）に起因する愛情飢餓感の別の姿であるのかは定かでない。だが、もし彼女が「外なる豊かさ・内なる貧しさ」、「豊かさの中の愛情飢餓」という今日の問題も抱えていたのだったら、彼女のお姫様願望も、相手の男をモノ扱いする不遜な態度も、他人操作的に振舞う自己中心性も、典型的なボーダーラインの性格特性と見なせそうである。

1920年代はアメリカにとっては繁栄に憑かれた時代だった。人々は世俗的価値観に染まり、利根的な享楽主義に走る傾向があったが、続く30年代が世界的に抑圧・内向化・対立の暗黒時代となったことを考えると、束の間のお祭り気分が浮かれ騒ぎながらも、欲望を滾らせ感性を自由に解放できた時代だった。女性もかつてのキリスト教的「良妻賢母」の固定観念から解かれて、次第に自己を主張し自由を享受できるようになった。女性にも男性同様、結婚して子供ができてからも、いつまでも自分が主役の座にとどまり、自由に恋をして、好きなだけ遊びたいという潜在願望があるとすれば、まさにこの作品の主人公がその抑圧されがちな潜在願望を一身に体現しているように思う。ただ時代を先取りし過ぎたため、狂乱・放蕩の時代性の湯垢に塗れ過ぎて、強迫的な、神経症的な病理性を滲ませつつ、結局は破綻を来す結果となりそうな雲行きなのだ。

彼女がフラッパー・ワイフとして、恐らく今後もその浮気性が治らず、何人もの男を泣かせながら、でもその都度その都度、明るく、健気に、軽薄に、一生懸命悩み込みながら生きていくだろう事を考えると、自分の欠陥を開けっ広げにしながらか、どこまでも自分に忠実で真面目であるヤンキー娘らしく思えて、如何にも面白い。また、女が強くなった、立場逆転の可笑しさは、今日の日本の状況と正しく符合する。彼女の〈どたばた喜劇〉は、女子大生には大いに教訓となるところがあろう、と余分なことまで書くと、本来の純学問的作品研究から逸脱す

るという謗りを受けることになる。だが、作品の問題性を今日の日本まで手繰り寄せて考えると、余韻を楽しむことが「教養的な読み」としての作品鑑賞では一番美味しい所になる、というのもまた事実である。

使用テキスト

*The Collected Short Stories of Ring Lardner*, (The Modern Library: New York, 1946)

#### 参考・引用文献

- 1 清水博 (編)、『アメリカ史 (新版)』、山川出版社、1969
- 2 亀井俊介、『荒野のアメリカ』、南雲堂、1987
- 3 「現代思想〈臨時増刊〉」、『総特集=1920年代の光と影』、青土社、1979
- 4 松山信直 (編)、『アメリカ文学とニューヨーク』、南雲堂、1985
- 5 佐伯彰一、『アメリカ文学史——『エゴのゆくえ』』、筑摩書房、1971
- 6 別府恵子・渡辺和子 (編著)、『アメリカ文学史——植民地文学からポストモダンまで』、ミネルヴァ書房、1989
- 7 武藤脩二、『アメリカ文学と祝祭』、研究社選書、1982
- 8 小此木啓吾、『現代人の心をさぐる』、朝日新聞社、1986
- 9 町沢静夫、『ボーダーラインの心の病理』、創元社、1990
- 10 大平健、『豊かさの病理』、岩波新書、1990
- 11 稲村博、『若者・アパシーの時代——急増する無気力とその背景』、NHKブックス、1989
- 12 「青年心理」No. 79、『特集=〈モノ〉社会の深層』、1990
- 13 「青年心理」No. 86、『特集=豊かさ世代・豊かさ感覚』、1991